

中国の医療と華西村

多摩大学 統合リスクマネジメント研究所

医療リスクマネジメントセンター 教授

(社) 農協共済総合研究所 客員研究員 真野 俊樹

1 中国の医療を巡る背景

中華人民共和国（以下、中国という）は、2010年にGDPで日本を上回って以降、世界第二位の経済大国として認知されている。中国のたぐいまれなる経済発展は、鄧小平が1978年12月に行った改革開放路線という、中国の市場経済移行政策に端を発するとされる。しかし、この政策は同時に中国社会に大きな矛盾を生み出したともいえる。農村部と都市部、沿岸部と内陸部における経済格差が拡大した。また、同じ都市部であっても、例えば昔からの露天商やタクシーの運転手などは、物価が安いために賃金も低く、バブルともいえる好景気の恩恵を受けているとは、とてもいえない。

中国の医療の現状を見てみよう。2011年現在、中国では、医師210万人、看護師160万人、薬剤師33万人、検査技師22万人が働いている。全国に約90万箇所設置されている医療機関のうち、総合病院は13,364病院、中医病院は約3,000病院となっている。民間設立の総合病院は2,658病院であり、そのうち2,549病院が営利病院である。なお、開業医として働いている医師は、病院を定年後に開業する 경우가多く、漢方医や歯科医を除けばその数は少ない。

医療費については、2009年のデータで年間14,535億元（約18.1兆円¹）となっている。

そのうち政府支出3,593億元（24.7%）、事業主等支出5,065億元（34.9%）、個人負担5,875億元（40.4%）である。1名あたりの医療費は、都市1,862元、農村455元となっている。

中国の医療保険制度をきわめて簡単に言えば、都市の企業の職員のための都市労働者基本医療保険制度、家族や自営業のための労働保険医療制度、農村部のための農村合作医療制度の3つからなる。手厚さの順で言えば、都市労働者基本医療保険制度、労働保険医療制度、農村合作医療制度の順となるが、農村合作医療制度については薬剤費用の全額を自己負担しなくてはならず、手厚い制度にはなっていない。

2 中国経済における医療の位置づけ

中国では、医療の位置づけが独特である。まず、国民の中に、医療は値が高いものであるという認識がある。さらに、社会保障という概念がある西洋諸国や日本では、医療は社会保障の一部として位置づけられているが、中国では、医療は社会保障ではなくビジネスであるという認識がある。医師の技術料（正確には技術料という概念はなく、診察費用）にも差があり、医師によって値段が異なる。したがって、支払能力によって受けられる医療が異なる、階層医療と言ってもいいだろう。

1 1元あたり約12.5円（2012年7月11日レートで換算）

例えば、多くの病院にVIP外来が存在し、政府高官や病院幹部等は廉価ですぐに医療を受けることができる。また国際部を設置し、外国人を診察している病院もある。サービス内容はVIP外来と同様となっている場合が多いが、その費用は当然、普通の外来よりも高額となっている。

薬剤価格については、諸外国との間で最も開きがある。院内製剤が充実している中国において、病院が独自に薬剤を調合しているの（認可は受けている）、安い薬を渡すことができる。その意味で、日本で話題になっているようなジェネリック医薬品政策は、さほど重視されていない。言い方を換えれば、ほとんどがジェネリック医薬品ともいえる。ジェネリック医薬品の場合でも、病院の薬事委員会にその薬剤が収載されれば、院内製剤と同様に安い薬剤として処方されるようだ。西洋薬で特許期間中のものは当然、高価である。また中国製の製品に次いで、外資と中国企業の合弁で作られる薬剤の値段は安くなっている。

3 医療格差が生じた理由

なぜ医療にこのような格差が生じてしまったのか。この現象は経済学的に非常に明快に説明できる。

まず、中国の医療は1980年頃までは国営であった。自己負担も少なく（あるいはほとんどなく）、まさに平等な医療であった。しかし、改革開放政策の結果、医療においては市場化の道を突き進むことになる。すなわち病院は、国立のままであるが、独立採算制に移行したことにより、補助金がカットされたり減額されたりすることで運営費用をまかなわざるを得なくなったのである。

医療分野は情報の非対称性が大きな分野である。そのために日本をはじめとする先進諸国では医療を純粋な自由市場に委ねず公的な管理の下に置き、準市場としている。もちろん、中国においても即座に100%の市場化を行ったわけではない。現在でもそうであるが、病院の土地建物の所有は国であり、医療の提供者は公務員である。また、医療費も公定である。一見すると市場原理主義ではないようにさえ見える。しかし、独立採算制に移行したことで赤字経営が許されなくなった病院は、情報の非対称性を使い、医療においては患者が弱者であり、医療提供者が強者である立場を巧みに利用した。

おりしも、人口ボーナス期に当たっている中国では、患者の数は膨大であり、患者が医療機関を選ぶことなど到底できるものではない。予約券をとるために3日前から病院に寝袋を持って並ぶことは日常的なことであり、ある循環器の専門病院では、手術の待機リストが14年待ちになったというような話も飛び交う有様である。

真偽のほどは不明であるが、このような状況で、中国の医療では、患者からの袖の下や、薬剤によるマージンによって医師も病院も儲けていると言われている。医師によって初診料は違うが価格は許可制であり、料金表が掲げられているのにも関わらず、このような状態にある。これは、まさに市場の失敗と言ってもいいだろう。中国もこの状態を是としなが、医療における改革開放路線をあきらめてはいない。すなわち、発想としては、間違った方向に市場化への舵を切ったが、市場化するという方向性自体は正しいという判断であろう。言い換えれば、上述した状態に陥った現状は、市場の失敗というより政府の失敗

であるという認識だ。しかし、この考え方で政府が推し進めれば、中国の医療は米国と同様のものになる。

人口1人あたりのGDPが3,000ドルを超え、タイにあと一步と迫っている中国であるが、やはり急速な経済発展には格差がつきものである。そして医療でお金を儲けようとする動きが強いなか、多くの庶民にしわ寄せが来ているようだ。中国の病院では、病院の中で診療の各段階において支払が強要される。わかりやすく言えば、診療の段階、画像撮影の段階、薬剤投与の段階という形で、それぞれの段階で費用を精算しないと次に進めない。最後の薬剤投与まで辿り着ける人は少なく、そのような人は街で安い薬剤を何でもいから手に入れるといった、おそろしい話まで聞かれるくらいだ。医療の、私的財的な要素が前面に出てしまっていると言えよう。

4 上海の医療事情

都市型の医療保険は都市の病院の受診が可能であるが、農村型の医療保険で都市の病院を受診することはできない。したがって、農村では「衛生院」が医療の中心であり、高度な医療を受けることは不可能となっている。そこで、重篤な疾患にかかった農村合作医療制度の加入者は、上海など都心の病院を自費で受診することになる。ただし、自費で受診することは可能だが、復旦大学の附属病院や交通大学の附属病院といった、上海の有名病院に勤務する医師の診察を受けるためには、診察券を購入しなければならない。この値段は国が管理しているので、高くても数百元の単位なのだが、問題はこのような有名病院に勤務する医師が、医療の質を担保するために診察の量を制限していることだ。つまり1日

に診察する患者の量を制限しているのも、とても需要にあわない。したがって、診察券を得るために何日か前から順番待ちをしたり、ダフ屋から高額で診察券を購入するといったことが行われている。場合によっては借金をしてでも、有名医師の診療の権利を買ったりする場合もある。それで病気が治らなかったような場合には、医師への怒りが爆発する。また、このような状況なので、医師も患者から選ばれているという意識がない。言い換えれば医師と患者の信頼関係がなく、医師が襲われたりすることもあるようだ。

中国では、「看病難、看病貴」という言葉が新聞等のメディアに頻繁に露出する。これは、医療機関の不足や老朽化、レベルの低さなどにより、患者が大病院に集中し受診できないといういわゆる「看病難」の問題、また、補助金がなくなった病院の経営を患者からの医療費収入で補なおうとするために、過剰な医療検査などを重ね、結果として医療費の高騰につながる、いわゆる「看病貴」の問題を意味している。

5 華西村での試み

華西村は、共産主義中国のなかにあって独自に資本主義化された村と言えるかもしれない。2009年には中国世界記録協会により中国で最も豊かな農村として認定されている。なお、農業収入は現在ほとんどない。

現在の人口は約3万人であるが、村の発足当初の1961年は数百名で、面積は0.96km²、1人あたりの年間平均所得はわずか53元であった。この村の実質上の開祖者である呉仁宝前党書記は現在82歳であるが、この偉人によって、村人が事業に出資するという資本主義の手法を取り入れられたと言われる。しかし、

呉氏が資本主義の手法を取り入れたのは、鄧小平の指導体制下で1978年12月に開始された改革開放以前のことであり、なぜこのようなことが可能であったのかは不明である。

現在、村の企業としての売上は600億元（約7,500億円）である。その中心は、鉄鋼業、繊維業、最近ではそれに観光業も加わり、58の企業、60億元あまりの固定資産を持つ。面積は、35km²に拡大した。

観光客は毎年200万人で、本土、香港、台湾から訪れる人が多い。華西村は中国の成功の一つのモデルとして、注目と関心を集めているためである。逆に、日本人や西洋人はほとんどいない。観光業での売上は2億元（約25億円）という。

創始者メンバー及び家族の1,500名は、現在、働いていない。しかし株主として1人当たり約5億円の売上げを誇っており、配当の90%は強制的に徴収されて税金とも言える形で再投資される。この点が共産主義であるが、残りの10%でも800~1,000万円くらいの年収になるという。さらに、創始者やその家族1,500人は、ベンツなどの高級車を無料で支給され、家は500~600m²の豪邸に住んでいる（写真1）。一方、創始者メンバー以外の、鉄鋼、繊維業に従事している約3万人の村民にはそのようなメリットはない。無料の集合住宅と給与を与えられ、村の観光ガイドとして、あるいはホテルやレストラン等で働いている。なお、観光業に関しては、1つの旅行会社の独占事業になっている。また周辺にマンションや住宅をつくり、販売するという、不動産業への展開も考えている。

上海から高速道路を走ると突如巨大な塔が見えてくる（写真2）。華西村が誇る5つ星ホテル「華西竜希国際大酒店」である。観光業

を重視するというのと、村ができてから50周年を祝うということで建設された。72階建てのこのホテル（写真3）は、村の成功の象徴でもあり、年間に200万人の観光客を宿泊させている。ちなみに、このホテルは日本の「横浜ランドマークタワー」（296m）より30m以



写真1



写真2



写真3（夜景）



写真 4



写真 6



写真 5

上高いことになる。なお、ホテルには純金を1トン使った牛の像を置いている。宿泊料金は公称では1泊3万円弱といったところである。さらに進むといくつかの古色蒼然とした塔が見えてくる。これらの塔のビルには、村役場、幼稚園、病院（正確には診療所と人間ドック施設）、事務所等が入居している。華西村では、1,500人すべてが無料で診察できる診療所を2007年に作った（写真4、5）。中国では、都会の富裕層を除いて健康診断や人間ドックを行って自らの健康管理や健康増進に努めるといった習慣はない。それを変えさせたいというのが中国のモデル村である華西村の華西健康中心の目標でもある。この村では年に2回の人間ドックを行っている。村の創始者

たちは無料で受診できる。ちなみに、この診療所にはPET-CTが装備されている（写真6）。

6 まとめ

中国では、欧米型の消費型資本主義が上海などの都会で限りなく発展している。一方、矛盾しているようだが、私有を認めない共産主義を前提とした資本主義を華西村は具現化している。また、都会では医療の格差がみられるが、華西村では人間ドックを中心に予防医療を充実させる方向で、村民の福祉に貢献しようとしている。非常に多くの中国人がこの見学に来るモデル村であることを考えると、欧米型の消費文明を嫌い、独自の中国型資本主義を構築しているともいえよう。

【参考文献】

- ・真野俊樹（2009）『グローバル化する医療メディカルツーリズムとは何か』岩波書店
- ・広井良典・駒村康平編（2003）『アジアの社会保障』東京大学出版会
- ・「アジア・太平洋地域の医療保障制度 特集」『医療と社会』Vol. 18 No. 1、2008、公益財団法人医療科学研究所
- ・井伊雅子編（2009）『アジアの医療保障制度』東京大学出版会